

「エチカ」ゼミ 第9回

幾何学的秩序によって論証されたエチカ

第二部 精神の本性および起源について

定理二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇

2021年12月7日大谷美緒

スピノザにとっての「妥当」。

〇〇は妥当な認識を含んでいないと、とか明瞭判然ではないというような文章がこんかいたくさん出てきている。スピノザにとって妥当とはなんなのか。定理二八の書き方が結構衝撃だった。

定理二八 人間身体の変状の観念は、単に人間精神に関連している限り、明瞭判然たるものではなく、混乱したものである。

証明 なぜなら、人間身体の変状の観念は外部の物体ならびに人間身体自身の本性を含んでいる(この部の定理一六により)。しかもそれは人間身体の本性的みならずその部分の本性も含んでいなければならない。なぜなら変状とは人間身体の部分、したがってまた身体全体が刺激される様式だからである(要請三により)。ところが(この部の定理二四および二五により)外部の物体の妥当な認識ならびに人間身体を組織する部分の妥当な認識は神が人間精神に変状したと見られる限りにおいては神の中になく、神が他の多くの観念に変状したと見られる限りにおいて神の中に在る、〈言いかえれば(この部の定理一三により)この認識は神が人間精神の本性を構成する限りにおいては神の中になく〉。ゆえにこの変状の観念は、単に人間精神に関連している限りは、いわば前提のない結論のようなものである。言いかえればそれは(それ自体で明白のように)混乱した観念である。

「外部の物体の妥当な認識ならびに人間身体を組織する部分の妥当な認識は神が人間精神に変状したと見られる限りにおいては神の中になく、神が他の多くの観念に変状したと見られる限りにおいて神の中に在る」とある。人間身体の変状の観念によって人間身体自身を認識はする(定理一九より)が、その観念自体は、混乱している。

あまり上手く言えないが、人間の認識している対象そのものではない他のものに神は変状している、人間精神は神という必然性そのものを知ることができないと言っているように思う。その必然性なしでものごとを認識しているということは、知るべき前提をしらず結論をべているということ。世界(神)というすべてに対して人間精神というものの限定制が示されているように思う。